小田原教育

第114号

平成２３年3月２４日

ハマエンドウ

波しぶきのかかる岩場からゆるやかな崖や切り立った崖のわずかな割れ目やくぼみに生活している植物の中に、海岸独特の植物を観察することができます。

ハマエンドウは砂地や小石の多い浜に見られ、スイトピーに似た花を6月ごろ咲かせます。

目　　次

巻頭言

学ぶことから

小田原市教育研究所運営協議会委員長 …… 2

1　学びの架け橋

「学習意欲を喚起する学習活動のあり方と小中の連携」

社会科　プロジェクト研修員 …… 3

2　小さなこころみ

①「一人ひとりが成長を実感できるＯＪＴに」

学校におけるＯＪＴを活用した人材育成に関する研究員 …… 4

②「外国語活動を楽しく！」～ALT とともに進めるレッスンプランの作成に向けて～

小学校外国語活動に関する研究員 …… 5

3　ある教室から

「対話はキャッチボール」

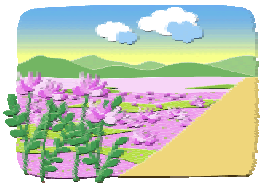
教育指導課指導主事 …… 6

4　研究所だより①②

教育指導課指導主事 …… 7

巻頭言

学ぶことから



小田原市教育研究所運営協議会委員長

いつの間にか、教員生活 37 年が終わろうとしています。振り返ってみるとあっという間に過ぎ去ったような気もしますが、それぞれの年を思い起こすと長かったようにも思います。新採用の頃は、何も分からず無我夢中に情熱だけで教育に携わっていたように思います。

そんな中で私に一つの大きな転機をもたらした教頭先生のアドバイスがありました。それは、3 年生の体育の学習でした。鉄棒の前に一列に並べ教師が笛を吹いて次から次に逆上がりをする授業でした。授業を見ていた教頭先生から、一斉に教師の指示のもとに同じ技をやらせるのは、運動を手段として体を鍛えることを目的とした授業で、これからは、自分のできる技で楽しんだり、できるようになりたい技に挑戦したりする運動を目的とした学習やグループ学習を取り入れながら行ったほうが良いというご指導をいただきました。

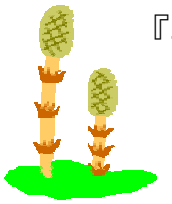
そのとき私は、自分の今もっている力ではできない技をやらされたら、怖いだろうし、つまらないだろうと思いました。そして、自己流から、きちんとした理論を学び実践に活かすように研究を積み重ねていきました。

始めは、理論が難しくて理解できず苦労しましたが、研究会に参加し学んでいくうちに徐々に理解できるようになり、授業も面白くなってきました。そして教育の基本をつかみました。それは、第 1 に運動の持っている楽しさをつかみそれを味わわせること。第 2 に子どもがその運動をどう捉え、どの程度でき、どのようにやりたいということを把握し

学習計画を立てること。第 3 に学習の仕方を身につけ、学習カードや資料などを活用し、めあてを持ち達成に向けて一生懸命に運動に取り組むこと。第 4 に個人や集団で運動の楽しさを味わうことによって、運動が好きになり自ら運動に親しむ子をはぐくむことです。

良い授業は、教師の情熱と日々の工夫と努力による良好な人間関係を基盤とした学級経営の上に成り立ち、すべての教育活動に生かすことができると思います。人は、さまざまな能力や個性を持っていますが、それらを活かすためには、基本を学ぶことが重要です。私も、教育研究所で児童指導や教科指導の研究をさせていただき、微力ではありましたが学んだことが、その後に生きていったように思います。

教師となったからには、子どもたちのために一生懸命に努力し、子どもたちが少しでも力を伸ばし、良い思い出を作り、幸せな人生を歩んでほしいと願うのではないでしょうか。子どものより良い育ちや幸せをめざし、最後まで情熱を失わず学び続けていきたいものです。



『学習意欲を喚起する学習活動のあり方と小中の連携』

～社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～

プロジェクト研修員（社会科）

１　はじめに

今年度、社会科部会は新しいメンバーとなって１年目の研究です。そこで、昨年度までの研究の成果と課題をふまえ、今年度も上記のテーマを継続して研究を進めてきました。特に、新学習指導要領の内容を視野に入れた上で、

①社会科教育における小・中学校の連携（「学習内容」「学び方（育てたい資質や能力）」）

②「社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育」のあり方（学習意欲を喚起する教材の選択と学習活動［指導過程］の工夫）

を軸として、理論研究および授業実践を行ってきました。

２　研究内容

研究を進めるにあたっては、小林　宏己先生（早稲田大学総合科学学術院教授）をお迎えし、理論・実践両側面について指導・助言を仰ぎました。その過程で、研究内容・視点を次のように焦点化し、授業実践を通して研究の課題を明らかにしていきました。

単元名『生活・文化の特色をとらえよう』
（中学２年：地理的分野）

（１）「小・中学校における連携」について

①「学習内容の連携」～ 小・中学校で共通する地域素材の中から、「小田原の町づくり」を取り上げました。授業ではその前の時間を公開しましたが、自分の生活感覚や小学校で学んだ内容・知識等が基盤となり、他の地域での事例と比較・検討をしながら学習を深めようとする姿が見られました。

②「学び方の連携」～意見を互いに聞きあう場面では、少人数のグループ学習の形態を取り入れました。相手の考えを聞きながら自分の思考を深めていく活動を通して、多面的なものの見方、考え方、とらえ方をしていこうとする姿が見られました。

（２）「社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う子どもたち」を育てるために

①「学習意欲を喚起する教材」～ 『伝統・文化の保存』という観点について、成功例ばかりではなく、様々な意見が交錯する事例（大阪府富田林市寺内町）を取り上げ、事象を多面的・多角的に考察するための根拠としました。また、教師が現地を取材した写真や生の声を提示することで、子どもの興味・関心を引き出すことができました。

②「ワークシートの活用」～ 知識を確認するための穴埋め式のワークシートではなく、単元全体を通じて自分なりの意見やその根拠を明確にし、『事実から根拠を持って考え、判断する』ことができるようなワークシートを作成しました。

３　おわりに

今年度の研究から見えてきたことは、「私が住む町：小田原」の教材化への可能性です。

小学校では「小田原」という地域そのものを学び、中学校では他地域についての学習を通して「小田原ではどうするか？」という視点から、自分の生き方を考える素地を養っていく、という考えです。今後の研究で、小・中学校の連携がさらに進められるとよいと考えています。

小さなこころみ

「一人ひとりが成長を実感できるＯＪＴに」

学校におけるＯＪＴを活用した人材育成に関する研究員

はじめに

OJT（On the Job Training）とは、学校内における日々の学校業務全般を通しての、計画的な人材育成のことです。現在、学力向上に対する要求や、いじめ、不登校等、多様化、複雑化する児童・生徒の問題や様々な要求をする保護者への対応など、適切に解決しなければならない教育課題が山積しています。それらの課題に対応し、信頼される学校づくりを進めるためには教職員一人ひとりの資質や力量の向上が不可欠です。そのために校内での教職員の人材育成をどのように進めていけばよいのか、それについての考え方や具体的な方法について、私たちは研究を進めています。

研究内容

OJT とはなにか、学校内における OJT とはどのようなものをいうのか。まず、そこから話し合いはスタートしました。日々の学校業務の中で、私たちは「OJT」と意識はしていなくても、OJT と思われることを実践しています。日頃行っていることで、もうひと工夫したら、よりよい OJT になるのではないか、それには、まず、一人ひとりが自分を見つめ直し、教師としての自分の力を確認することが大事ではないか、という方向性が出されました。その上で、自分にとって足りない力は何かを知り、それをお互いに教えあい、向上していくことが大切であると考えました。では、教員に必要な力とは何か。お互いに考えを持ち寄り、整理し、「学習指導　授業力」「児童・生徒理解力・生活指導力」「外部との連携・折衝力」「企画・運営力」という力にまとめました。また、一方で、私たち教員は同じ職場で仕事をしていながら、意外にお互いのことを知りません。プライベートな場で話をすると、「あの人はこんな資格をもっていたのだ」とか「あの人にこんな一面があったのだ」と驚かされることもあります。教員同士がお互いを知ることは、そのことが直接仕事に生かせることのみならず、人間関係の潤滑油となり、気持ちよく仕事ができることになるのではないかと考えました。お互いを知り、よりよい人間関係を築くためにはどうしたらよいのか。そこで、アンケートをもとにした話し合いの場をもつことを提案してみよう、ということになりました。以上の考え方、方向性に基づいて「教員に必要な力アンケート」「わたしは・・・〇〇です」という 2 つのアンケートを作成しました。

今後の取り組み

作成した 2 つのアンケートを使い、各学校にお願いして OJT を実践していくことが、これからの取り組みです。実践することにより、教員同士がお互いに分かりあい、学校に行くのが楽しくなるような OJT。「教員に必要な力」が教える側、教えられる側、ともに伸び、「実践してよかった」と思えるような OJT にしていきたいと考えています。

「外国語活動を楽しく！」
～ＡＬＴとともに進めるレッスンプランの作成に向けて～

小学校外国語活動に関する研究員

１　はじめに

昨年度は英語ノートをもとにして、学級担任が一人で授業を行うことができるレッスンプランを作成した。今年度はそのプランをもとに、ALT と協力し合いながら、ともに授業を進めることができるプランの作成に取り組んだ。

しかし、業務委託による法律上の制約のため、TT での授業形態をとることができず、モデルプラン例づくりには大変悩んだ。研究員が実際に TT の形式をとらない ALT との授業を実践し、そのたびに分かったこと、感じたこと、見えてきたことをまとめ、『ALT とともに進めるレッスンプラン例』を生み出した。

２　研究内容

「来年度から外国語活動がはじまるけれどどうしたらよいだろう。」「ALT とどうやって授業を行っていけばよいか分からない。」現場の先生方の声から、外国語活動への不安を伺い知ることができる。そのような不安を少しでも払拭できるようにと研究員が実際に行った授業をもとにレッスンプランとモデルプランを作成した。

形式は、ALT だけに任せず、HRT と ALT が協力し合いながら行う指導分担型にし、指導の流れが分かりやすいように工夫した。

導入の「チャンツ」と展開のデモンストレーションは ALT が行い、アクティビティの説明や評価は HRT 主導で進めるといったように、それぞれの特性を生かして行うようにした。また、内容により「teacher's　talk」をしてもらうと、より異文化理解をはかることができる。

モデルプラン例は、単元内容を入れてすぐに活用できるようにした。これをもとにレッスンプランを作成し、予め委託会社に送ることで、ALT にポイントが英訳されたレッスンプランが届き、よりスムーズな授業展開が期待できる。「ALT と授業の確認をする時間がない。」という悩みを改善するひとつの手立てとなればと思う。

３　今後の取り組み

研究員が授業実践を積み重ね、『ALT とともに進めるレッスンプラン例』のさらなる充実をはかっていく予定である。

『ALT とともに進めるレッスンプラン例　暫定版』が、外国語活動を楽しみ、そして自信をもって取り組める一助になれば幸いである。

ある教室から

「対話はキャッチボール」

教育指導課指導主事

“ Good morning! ” “ How are you ? ” “ I like apples. ” 教室に入ると、英語が飛び交っていた。１人ひとりに目を向けると、自分の知っている英語を得意満面に披露している子、楽しげに、ジェスチャーたっぷりに話している子、中には、恥ずかしそうに片言の英語を、小さな声で少しでも話していこうとしている子の姿があり微笑ましい。

外国語活動が、いよいよ平成２３年４月より、小学校で必修科目となる。小田原市では、すでに平成２２年度より、ALT とともに授業を展開してきたわけであるが、その人数も３名から５名に増える予定であり、以前に増して、ALT に接する機会にも恵まれる。

小学校の教員としては、意思疎通がままならない中で ALT との授業に臨んできたことであろうが、外国文化に触れる絶好の機会であったとも言えるのではないか。

小学校外国語活動を参観する機会に恵まれ、思うことがある。それは、小学校の先生方が、大変な苦労をしつつも、努力をしながら工夫のある授業を展開していることである。事前の教材研究や発音に不安を感じながらも、その手作りの教具の面白さや丁寧さ、加えて、子どもと共に楽しんでいる姿を見るたびに、その素晴らしさに驚かされる。

教員が自分の学校生活を振り返ったとき、英語を小学校時代に学んできた方は稀であろう。人は、自らが経験したことについてはある程度想定ができるが、未知のものについて戸惑いを覚えるのは当然といえる。そのような中にあって、試行錯誤し、工夫を加えながら、授業をさらに良くしていこうと、外国語活動の授業に取り組んでこられた先生方の熱心な姿が、とても印象的であった。

言語活動が重視される中で、対話は重要である。言語力とは、他者とコミュニケーションを行うために必要な能力であり、対話形式は大事であろう。楽しく続けるためには「相手のことを考えることが大切」という点で、キャッチボールとコミュニケーションは良く似ているのではないだろうか。こちらが、相手のことを思って丁寧に良い球を投げ、相手からも取りやすい球が戻ってくる。ドッヂボールではいけない。「相手に球をぶつければ勝ち」では、コミュニケーションは成り立たない。外国語活動では楽しく心の通う言葉のキャッチボールを通じて、心を耕し、豊かな人間性をはぐくむことが大切ではないだろうか。

自分の教え子が将来、外国語に携わる職業に就いたり、海外で生活したりすることもあるだろう。成長した彼らが、こんなことを言ってくれたらどうだろう。「小学校時代に英語を楽しく学べたから、私は、今、この職業に就いています」と。英語が好きになり、世界にはばたく人材が、もしかしたら今、目の前にいるかもしれない。その芽を育てたり、その一歩を後押ししたりしているのかもしれないと思えることが、外国語教育にかかわる者の希望やロマンと言えるのではないだろうか。いつかそんな日が来ることを願っている。

研究所だより⑦

自分を変える原動力は自分の中にある

～教育長に聞く。教職員に求められる資質をどう高めていくか～

「学校におけるＯＪＴを活用した人材育成に関する研究」における経験年数による職員構成の調査で、小田原市における、経験 10 年以下の教員の割合は、小学校において 45%、中学校において３０％という結果でした。若手教員が今後ますます増えていく中で、これまでに蓄積されてきた指導技術をどう伝えていくか、さらに、新学習指導要領で求められている学習指導の工夫・改善を具体的にどのように行っていくかなど、教職員の資質向上が大きな課題となっています。そこで、これからの教職員に求められる資質や、教職員研修を主な事業の一つとする教育研究所に期待することなどを、前田輝男教育長に伺いました。

教育長（以下教）「教職員に求められている資質には３つある。①ミッション（使命感・意欲）、②専門性、③人間性。その３つを高めていく研修を、それぞれのライフステージに応じて行っていくことが必要。」

Q「専門性を高めていく、というところはわかりますが、ミッションや人間性を自分でどのように高めていくか、難しいと思いますが？」

教「まず、ミッションということでいえば、毎日緊張感、問題意識をもって教育活動にあたること。今の子ども達が置かれている（社会の）現状をどうとらえるか、そして 30 年後はどういう世界になっているのかを描くことが必要。例えば、世界の人口。現在の世界の人口は 69 億人。40 年後には 91 億から 100 億人になると言われている。その時にどういう社会になっていて、どういう問題を世界は抱えることになるのか。食糧問題はどうか。経済、軍事や外交はどうか。子どもたちが生きていく背景をグローバルにとらえていくこと。そして、そこに生きる子ども達に、今、何を教育すべきか考える。そこにミッションが生まれる。」

Q「では、人間性は？」

教「まず、教師としてどういう人間であるべきか、という問いを常にもつこと。性格は変えられないというが、そんなことはない。変わっていく自分がどんどん自分を変えていく。その為に必要なのは問題解決能力。人間は毎日が問題解決の連続だという意識をもつことが、自らを変えていく。」

教「世阿弥の教えに『離見の見』というものがある。少し離れた所から、自分自身を客観的に観ること。教員であれば、日々『客席』から、子ども達から見られている。その子どもの後ろに立って、教師としての自分自身を見つめていくこと。」

Q「経験から考えられたことでしょうか？」

教「教員になって２年目、何をやってもうまくいかないことがあった。そこで気付いたのは、子どもを変えるには、自分が変わるしかないということ。しかし、自分自身を知らないと自己改善はできない。自分をよく見つめるようにした。それから発展志向であること。落ち込んだり心配したりするよりも、プラス思考で前向きにやってきた。そして、イノセントな心を常にもつこと。子どもっぽくていい。子どもの心に近い自分でありたいと思っている。」

Q「世界の情勢から世阿弥まで、幅広い知識をおもちですが？」

教「いろいろなことに興味・関心をもつようにしている。学びっていうのは意欲だよね。子どもにも意欲をもってほしい。『学欲（がくよく）』というのかな。学ぶ意欲を。」

Q「最後に、研究所に期待されることを。」

教「本来、教育に関するデータの収集や、その考察に基づく施策への提言など、シンクタンクとしての機能を担うのが研究所。データの蓄積や、蔵書の充実など、研究所としての機能を高めなくてはならない。そして、小田原市の教職員にとって、もっと身近な存在であるべき。『研究所に行けば、きっと何か役に立つことがある、教育の最新情報がわかる』と思われるような場所であるべきだと思う。『おだわら未来学舎』も研究所が牽引していってほしいと思っている。」

研究所だより②

小田原の教育の充実に向けて

～平成 22 年度の教育研究所事業をふりかえって～

プロジェクト研修

プロジェクト研修では、それぞれの部会で授業が公開されました。

研修のまとめについて各校に送付しましたので、ご一読ください。

テーマ・授業内容
国語科部会 [思考を深めて表現力につなぐための学習活動の工夫] ２年「話す『効果的な話し方をしよう』」（城南中）
社会科部会 [学習意欲を喚起する学習活動のあり方と小中の連携]～社会との関わりを実感し、自らの生き方を問う社会科教育をめざして～ ２年「生活・文化の特色をとらえよう」（泉中）
算数・数学科部会 [活用する力を育てる算数・数学指導の工夫] ～数学的表現力を育む～ ６年「およその面積を求めよう」（豊川小）
理科部会 [理科好きな子を育てる学習の工夫] ～小中の理科学習を通して～ ２年「化学変化と原子・分子」（城山中）
保健体育部会 [小中学校の系統性を考えた体育学習] ボール運動・球技の領域を中心にして ６年「ティーボール（ﾍﾞｰｽﾎﾞｰﾙ型）」（新玉小）
外国語活動・外国語部会 [小・中のつながりを意識したコミュニケーション能力の育成をめざして] ５年「ワールドバザールへようこそ」（久野小）
道徳部会 [一人ひとりの心に響き、道徳的実践力の育成を目指す授業の工夫] ３年「負けない心～星野富弘～」（山王小）

来年度も授業公開がありますので、「百聞は一見に如かず」、研修員の皆さんの、新しい授業づくりへの提案をぜひご覧ください。

ニュース

平成 22 年度に最も多く貸し出された本は、「先生のためのアドラー心理学」でした。来年度も蔵書の充実を図りたいと考えています。ぜひ研究所にお立ち寄りください。

共同研究

平成 22 年度より、「小学校学級経営に関する研究(21 年度より継続)」「小学校外国語活動に関する研究(22 年度より新たなメンバーで継続)」に加えて、新たに「学校におけるＯＪＴを活用した人材育成に関する研究」「小中学校が連携したキャリア教育に関する研究」「授業評価を活用した授業改善に関する研究」が始まりました。

「ＯＪＴって何？」という言葉の理解から始まり、「小田原で育つ子どもたちに必要なキャリア教育は？」「価値ある『授業評価』って？評価したことを指導にどうやってつなげたらいいの？」等、様々な課題の解決に向けて、一歩一歩着実に進んでいます。

研究を進める中で、小中での指導の連続性や発達の段階などについての理解が深まったり、様々な教育課題を共有し合ったりしながら、解決の糸口が見え始めたように思います。次年度はさらに研究を進め、その成果を広く伝えるために知恵を絞っていきたいと考えています。

また、10 月には県教育研究所連盟の発表大会において、平成 20･21 年度の共同研究「中学校学習指導法に関する研究」での研究成果を発表していただきました。中学校での教科横断的な学習指導の工夫などについての具体的な発表内容に、参加者からは「これからの中学校での校内研究のあり方のヒントをいただきました」という声もあり、とても有意義な発表となりました。

小田原教育　第１１４号
発行日 平成２３年３月２４日（木）
発行所 小田原市教育研究所
発行者　所長　小泉　信二
〒250-8555 小田原市荻窪 300
電話　３３－１７３０